

江古田小校長室便り 「温故創新」

H29 (2017)・1226 NO67

校長 伊波喜一

形には ならぬけれども やり続け 我慢の先に 咲くは寒中

冬至を過ぎたものの、地平線に昇る太陽は午前6時を過ぎてもまだ暗い。電車の中から日の出を眺める毎日だ。能の創始者・世阿弥は「風姿花伝」の中で「寒中の花」という言葉を使っている。寒中の花とは、冬の寒さに隠れた固いつぼみが、いつの間にか芽を吹きだす不思議さをいう。そのことを芸事に例えている。曰く「地道に練習していても、なかなか芽が出ず、花開かないことがある。しかしある日突然、目を見張るほど芸の境地が深まることがある。だから、稽古を欠かしてはいけないし、休んでもいけない。稽古を続け通す中で必ず芸が深まり、花開くのだ」。伝聞だが、アフリカのある部族の雨乞いは必ず叶うそうだ。一体、どんな方法で、雨を降らせたのだろうか。雨を降らせるガスを、雲の中に打ち込んだのだろうか？ Non! その部族は、雨が降るまで雨乞いを続けたという。雨が降るまで、祈り続ける。結果が出るまで、祈り続ける。方法論ではなく、降らせてみせるという執念と絶対に諦めない心。その不断の積み重ねを経て手に入れた果実の味は、格別であろう。